

調査報告 (Research Report ; Forschungsbericht)

外国語習得の影響要因

——ドイツ語学習の動機か？ドイツ人に対する態度か？——

玉岡 賀津雄(松山大学)

Katsuo Tamaoka (Matsuyama University, Japan)

メンツェル・バーバラ(佐賀大学)

Barbara Menzel (Saga University, Japan)

Influential Factors of Foreign Language Acquisition:
Motivation to Learn German? Or Attitude towards Germans?

The present study investigated the learning factors of “motivation” and “attitude” in relation to foreign language acquisition. Fortyfour Matsuyama university students (average of 20 years old) who selected German as one of the required foreign language courses participated in this study. As an indicator of motivation, the reasons for selecting the German language were measured by twelve “yes” or “no” check-list questions. Each “yes” answer was counted as 1 point, so the check-list can be regarded as a learning motivation scale of 0-to-12 points. As an indicator of attitude, the image towards the German people was assessed by twelve pairs of adjectives describing positive and negative characteristics of people (e. g. honest vs. dishonest). To make a 5-to-1 continuous scale, the positive side of every adjective was graded as 5 points

while the negative side was 1 point. A series of ANOVAs between the “yes” and “no” groups, classified in terms of the reasons given for selecting the German course, did not show any significant difference on the students’ final German grade. Correlational analyses further revealed that the reasons for German course selection did not relate to the final German grade ($r = 0.02$). The image scale indicated that the Japanese students hold an ethnic image of Germans as “creative”, “humorous” and “warm-hearted”, but “intrusive” and “rough”. An overall positive image towards the German people showed a significant relation ($r = 0.32$, $p < .05$) with the final German grade. The positive attitude towards the German people appeared to be one of the influential factors of learning German. An additional analysis indicated that the attendance ratio of twelve German classes was strongly related to the final grade ($r = 0.70$, $p < .0001$). Hence, continuous study strongly contributes to foreign language acquisition.

Faktoren, die den Zweitsprachenerwerbsprozeß beeinflussen :
Motivation zum Deutschlernen und Einstellungen den Deutschen gegenüber

Die vorliegende Untersuchung beschäftigt sich mit der Frage, inwiefern sich die beiden Faktoren “Motivation” und “Einstellung” auf den Fremdsprachenerwerb auswirken. Bei den Testpersonen handelt es sich um 44 Studenten der Universität Matsuyama, die im 2. Jahr Deutsch als zweite Wahlpflichtfremdsprache lernen.

Als Motivationsindikatoren dienen 12 “ja/nein”-Fragen, die sich auf die Beweggründe der Studenten, Deutsch statt einer anderen zweiten Fremdsprache gewählt zu haben, beziehen. Jede mit “ja” beantwortete Frage zählt als 1 Punkt, so daß sich eine Motivationskala von 0 bis 12 ergibt. Um den Einstellungsaspekt zu untersuchen, wird den Studenten eine Reihe von auf ihr Image von Deutschen bezogenen Gegensatzadjektivpaaren (z. B.: aufrichtig ↔ unaufrichtig) vorgelegt, bei denen sie sich für einen Wert zwischen 5 (positiver Aspekt) und 1 (negativer Aspekt) für jedes Adjektivpaar entscheiden müssen. Die Daten beider Erhebungen werden dann mit Hilfe des ANOVA-Analyseverfahrens mit der Semesterendnote der Studenten verglichen. In bezug auf den Motivationsfaktor ergibt sich keinerlei Korrelation zwischen der Anzahl der “ja”-Antworten und der Semesterendnote ($r = 0.02$). Die Analyse der Aussagen zur Einstellung ergibt das “typisch deutsche” Image einer kreativen, humorvollen und warmherzigen, aber auch aufdringlichen und unsensiblen Person. Eine allgemein positive Einstellung den Deutschen gegenüber korreliert signifikant mit einer hohen Semesterendnote ($r = 0.32, p < .05$) und kann damit als ein den Fremdsprachenerwerbsprozeß bereichernder Faktor angesehen werden. Als weiteres Ergebnis zeigt sich eine sehr starke Korrelation zwischen der Endnote und dem Anwesenheitsprozentsatz im Unterricht ($r = 0.70, p < .0001$).

1 研究の目的

外国語習得への影響要因を、学習者の「動機」(motivation)と「態度」(attitude)

の二つの視点から考察した。本研究は、近年中に実施予定の大規模な調査の予備調査として、ドイツ語を研究対象に選び、ドイツ語習得への影響要因を考察した。まず、動機づけの視点からドイツ語のクラスを選択した理由が、どのようにドイツ語の成績に影響しているかを調べた。選択の理由には、社会的な側面と心理的な側面の二つの影響要因から質問を構成して、そのドイツ語習得への影響を分析した。また、ドイツ人に対するイメージが良ければ、それだけドイツ語学習への動機づけとなり、ドイツ語習得を促進すると仮定して、ドイツ人に対するイメージを5段階評価で調査した。以下、これらの調査報告である。

2 研究の方法

ドイツ語選択の理由は「はい」または「いいえ」の二者択一の質問を使い、また、ドイツ人に対するイメージは肯定および否定的な形容詞を一对とした5段階評価を使って、それぞれの変数を測定した。その手順は、次に示す通りである。

2.1 調査対象

調査の対象となったのは、1992年度に松山大学で第2外国語としてドイツ語を選択した学生44名である。その内訳は、男性が30名、女性が14名である。平均年齢は、ちょうど20歳(240カ月)で、標準偏差が7カ月であった。したがって、年齢的なばらつきはほとんどなく、全員がほぼ20歳前後の学生である。また、松山大学に入学して、ドイツ語を英語に次ぐ第2言語として選択し、学習しているということで、一応、言語学習能力および言語適応能力は学生間でほぼ同じようなレベルであろうと仮定して、ドイツ語を学習することにした動機とドイツ人に対する態度に焦点を絞って考察することにした。

2.2 ドイツ語選択の理由を聞く質問項目の設定

ドイツ語選択の理由を探るために、「はい」または「いいえ」からなる質問を

12項目作成した。この内の8項目は、例えば、「東西ドイツの統一のニュースを聞き、ドイツに興味を持ったので、ドイツ語を選んだ。」とか社会的な理由である。本調査は、1992年に実施したものであるため、東西ドイツの統一は調査当時はまだ新しいニュースであった。他の4項目は、「他の外国語に比べて、日本人にとってドイツ語が発音しやすい言語だと聞き、ドイツ語を選んだ。」などドイツ語そのものの言語的特性に関する理由である。具体的な質問項目と「はい」と答えた学生数およびその44名中の割合は、表1に示した通りである。

この質問の設定には、二つの利点がある。まず、ドイツ語選択の理由を可能な限り絞って、「はい」または「いいえ」によるチェック・リスト方式を使うことで、それぞれの質問に対する割合を出し、12の質問項目を直接比較することができる。また、「はい」と回答した場合を1点、「いいえ」を0点とすることによって、ドイツ語選択の理由を12点満点に換算することができる。質問一つについて得点が1点であるため、0から12点までの等間隔尺度の連続変数と想定して、多様な統計的分析ができる。この際、各質問項目が1点ずつであるため、「とても」から「全然」などの5段階尺度などに見られるような、特定の質問項目の歪みによる全体への影響を避けることができる。本研究では、ドイツ語選択のチェック・リストによる点数が高い程、学習への動機づけが強いと仮定して、「学習動機尺度」(learning motivation scale)と考えた。

2.3 ドイツ人に対するイメージ評価項目の設定

ドイツ人に対するイメージを測定するために、「まじめな」と「不まじめな」、「創造的な」と「非創造的な」などの対になった形容詞を12種類使ってドイツ人に対するイメージを調べた。その際、肯定的なイメージを表現した形容詞を5点とし、逆に否定的な形容詞を1点とすることによって、5から1までの評価指標を設定した。一対の形容詞を使うことで、二つの視点からイメージ評価ができるため、この種の尺度が陥りやすい中央化現象をある程度避けることができるのではないかと思われる。確かに、これでは等間隔尺度ではないものの、

一応、そう仮定して統計的分析を行った。また、同時に、比較基準として日本人のイメージについても聞き、ドイツ人のイメージと対比してみた。さらに、12種類の対になった形容詞の総合得点を「イメージ評価指標」(image evaluation index)として、ドイツ人に対する「態度」の反映であると考え、分析に使用した。

2.4 調査の手続き

松山大学の1992年度に開講されたドイツ語のクラスで、授業中にまとめて質問紙形式ですべての学生に回答を求めた。これらの学生については、合計12回の授業への出席回数と100点満点のドイツ語の最終成績をクラス担当教員から入手した。プライバシーの侵害を避けるために、データ・ファイルには個人の名前および学生番号は示されていない。

3 調査の結果および考察

データの分析は、相関係数によるドイツ語選択の理由およびドイツ語の成績との関係、やはり相関係数によるドイツ人および日本人のイメージ評価指標とドイツ語成績の関係および一連のテストによるドイツ人と日本人のイメージ評価指標の比較、さらに、相関係数による授業の出席状況とドイツ語の成績の関係の3つの視点から行った。

3.1 ドイツ語選択の理由とドイツ語習得の関係

表1および図1に示したように、12項目からなるドイツ語選択の理由のうち、最も選択者の多かったのは、「英語をすでに学んでいるので、他の外国語に比べ、ドイツ語が学びやすいと思ったので、ドイツ語を選んだ。」で、44名のうち36名の学生が理由として選んでいる。これは、81.82パーセントにあたる。次に多かったのが、「他の外国語に比べて、ドイツ語がおもしろそうな言語だと思ったので、ドイツ語を選んだ。」で、30名の学生が理由として選んでいる。こ

これは、68.18パーセントになる。上位二つは、いずれもドイツ語の言語的特性についての理由である。第3に多かったのが、「東西ドイツの統一のニュースを聞き、ドイツに興味を持ったので、ドイツ語を選んだ。」で、22名の学生が理由としている。ただし、割合は、ちょうど50パーセントであり、他の二つの上位項目と比べるとかなり少なくなる。この調査を実施したのが、1992年秋であり、1992年7月の東西ドイツ統一のニュースが新鮮であり、学生のドイツ語選択に強く影響したのであろう。本調査が、これから行う規模の大きい調査と比べてどのような違いが見られるかが、ドイツ語選択における社会的影響を見る上で、興味深い。おそらく、このような社会的なニュースの影響は、その新鮮さを失

表1 ドイツ語選択の理由と「はい」と答えた学生数および割合 (N=44)

番号	質 問 事 項	学生数	割 合
1	他の外国語に比べ、ドイツ語がおもしろそうな言語だと思ったので、ドイツ語を選んだ。	30	68.18%
2	英語をすでに学んでいるので、他の外国語に比べ、ドイツ語のほうが学びやすいと思ったので、ドイツ語を選んだ。	36	81.82%
3	ドイツと日本が第二次世界大戦で共に戦い、敗北した歴史を持つことからドイツに親近感を持ち、ドイツ語を選んだ。	4	9.09%
4	先輩や友達がドイツ語にしたので、私もドイツ語を選んだ。	16	36.36%
5	他の外国語よりも、ドイツ語やドイツについての知識が、将来の仕事に役立つのではないかと思ったので、ドイツ語を選んだ。	13	29.55%
6	東西ドイツの統一のニュースを聞き、ドイツに興味を持ったので、ドイツ語を選んだ。	22	50.00%
7	近い将来、ドイツを旅行したいと思い、ドイツ語を選んだ。	15	34.09%
8	他の外国語に比べ、単位を取るのが簡単だろうと思ったので、ドイツ語を選んだ。	17	38.64%
9	ヨーロッパの経済的な統一が進んでおり、ドイツが重要な役割を果たすようになると思われるため、ドイツ語を選んだ。	14	31.82%
10	ドイツが他の国々に比べ、社会・文化的に優れていると思い、ドイツ語を選んだ。	10	22.73%
11	他の外国語に比べ、日本人にとってドイツ語が発音しやすい言語だと聞き、ドイツ語を選んだ。	16	36.36%
12	以前にドイツについて学んだことから興味を持ち、ドイツ語を選んだ。	3	6.82%

うとともに薄れていくと思われる。

過半数を割っている項目ではあるが、第4の選択理由は、「他の外国語に比べ、単位を取るのが簡単だろうと思ったので、ドイツ語を選んだ。」で、17名の38.64パーセントの学生がこれを選んでいる。また、第5に、「先輩や友達がドイツ語にしたので、私もドイツ語を選んだ。」という項目を、16名の36.36パーセントの学生が選んでいる。また、同数の学生が、「他の外国語に比べて、日本人にとって発音しやすい言語だと聞き、ドイツ語を選んだ。」を理由に選んでいる。また、逆に最も選択者の少なかったのは、「以前にドイツについて学んだことから興味を持ち、ドイツ語を選んだ。」で、わずかに3名の6.82パーセントの学生が選んだにすぎない。また、「ドイツと日本が第二次世界大戦で共に戦い、敗北した

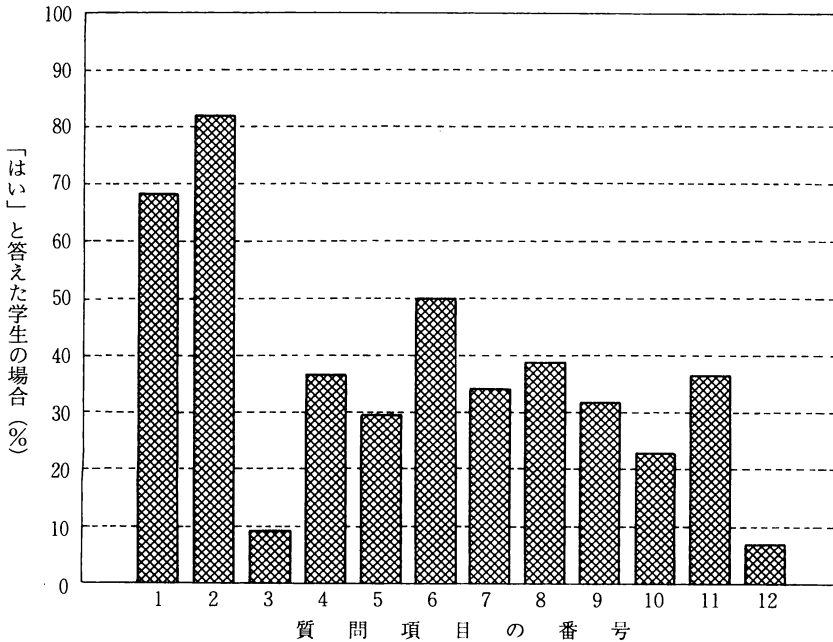


図1 ドイツ語選択の理由別にみた学生数の割合

歴史を持つことからドイツに親近感を持ち、ドイツ語を選んだ。」も、4名の9.09パーセントの学生が理由として選んだに過ぎなかった。これは、過去の歴史的な事実が、現在の学生のドイツ語に興味を持たせる要因ではないことを示しているであろう。むしろ、東西ドイツの統一など現在の社会的動向が、学生のドイツ語学習の動機づけとなっているようである。

さて、これらの選択理由と最終的なドイツ語の成績との関係を調べてみた。各ドイツ語選択の理由ごとに、12項目について「はい」と「いいえ」と回答した2つのグループ間の分散分析を行った。その結果、いずれのグループについても有意なグループ間の差は見られなかった。つまり、どの質問項目に示された理由でドイツ語を選択しようとも、ドイツ語の習得自体には影響しないという結果であった。さらに、ドイツ語選択の理由を示した質問項目に「はい」と回答した場合を1点とし、「いいえ」と回答した場合を0点として、0から12点の連続変数と考えた場合の得点を「学習動機尺度」として、ドイツ語の成績との相関を調べた。学習動機尺度は、最高得点の9点から最低得点の1点の範囲で、平均が4.45点、標準偏差が1.91点というばらつきの小さな分布となっている。ドイツ語の最終成績は、最高得点の90点から最低得点の24点の範囲に分布し、平均が71.11点、標準偏差が14.69点という、かなり広い範囲で大きく分散している。両変数の相関係数は、0.02であり、有意な相関はまったく見られなかった。つまり、どんなに多様な理由でドイツ語の学習を始めようとも、ドイツ語の成績には関係がないという結果であった。初期の学習への動機は、外国語の習得に影響しないという結論である。

3.2 ドイツ人と日本人のイメージ評価指標とドイツ語習得の関係

イメージ評価指標を見る場合に、二つの側面がある。まず、ドイツ人と日本人のイメージを5から1までのポイントで単独に考察する方法と、ドイツ人と日本人のイメージ評価指標を直接に比較する方法である。イメージ評価指標のデータは、表2に示した通りである。さらに、各対の形容詞ごとの平均は、表

2に示した。また、視覚的にドイツ人と日本人のイメージ評価指標を図2に描いた。

まず、ドイツ人と日本人のイメージ評価を別々に考察してみる。表3の平均値および図2の視覚的提示を参考にして、2以下の評価はないので、便宜的に4以上を肯定的なイメージ評価とし、3点以下を否定的なイメージ評価と決めて、日本人大学生が描いた各民族のイメージを表現してみる。ドイツ人のイメージを評価した場合に、「創造的」(M=4.23)であり、「ユーモア」(M=4.05)に溢れた、「心の暖かい」(M=4.07)イメージを抱いている。一方、否定的なイメージとしては、「でしゃばり」(M=2.95)で「粗野な」(M=2.93)という評価であった。また、自分達のイメージ評価である日本人については、「まじめ」(M=4.20)で、「ひかえめ」(M=4.25)で、「教養」(M=4.16)があり、「繊細な」(M=

表2 ドイツ人および日本人に対するイメージ評価指標の選択者数 (N=44)

ドイツ人……………網掛けなし
日本人 ……………網掛けあり

	5		4		3		2		1		
まじめな	17	9	20	21	6	14	1	0	0	0	まじめな
ひかえめな	22	1	15	10	4	19	2	14	1	0	でしゃばりな
創造的な	2	24	11	9	18	8	11	3	2	0	非創造的な
信頼できる	7	6	10	20	22	18	4	0	1	0	信頼できない
ユーモアのある	2	19	4	12	21	9	15	4	2	0	ユーモアのない
正直な	5	15	14	14	20	14	5	1	0	0	不正直な
上品な	7	6	16	13	17	22	3	3	1	0	下品な
心が暖かい	5	14	15	21	20	7	3	2	1	0	心が冷たい
民主的な	9	8	16	12	17	14	2	10	0	0	独裁的な
教養のある	21	11	11	22	10	10	2	1	0	0	無知な
柔軟な	1	13	7	17	19	8	14	5	3	1	頑固な
繊細な	15	2	16	7	11	2	2	14	0	0	粗野な

注：数字はイメージ度の選択者数

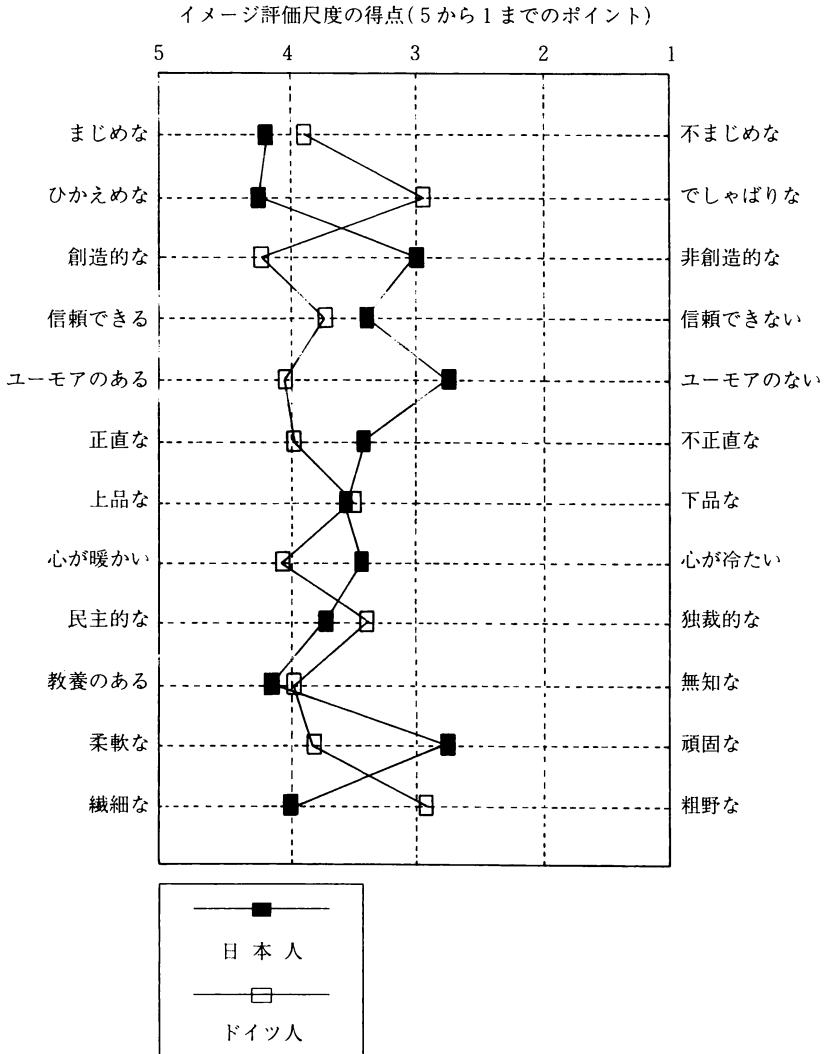


図2 ドイツ語を選択した学生のドイツ人および日本人に対するイメージ評価

4.00)という肯定的なイメージを抱いている。しかし、「非創造的」(M=3.00)で、「ユーモア」(M=2.75)のセンスがなく、「頑固」(M=2.75)という否定的なイメージを同時に持っている。このように、イメージ評価指標は、かなり適切に民族的特性を示しているようである。

それでは、相対的にドイツ人と日本人とを直接比較した場合はどうであろうか。大きな民族的なイメージの違いとして挙げられるのは(有意差が0.0001である項目)、次の5つの対の形容詞群である。まず、日本人が「ひかえめ」であるのに対して、ドイツ人が「でしゃばり」である [$t(44)=6.33, p<.0001$], 日本人が「非創造的」であるのに対してドイツ人が「創造的」である [$t(44)=-5.46, p<.0001$], 日本人が「ユーモアがない」のに対してドイツ人が「ユーモアのある」 [$t(44)=-5.90, p<.0001$], 日本人が「柔軟な」特質であるの

表3 ドイツ人および日本人に対するイメージ評価の平均

イメージ評価尺度 5 — 1	ドイツ人	日本人
まじめな—まじめな	3.89(0.72)	4.20(0.76)*
ひかえめな—でしゃばりな	2.95(0.81)	4.25(0.97)****
創造的な—非創造的な	4.23(0.99)	3.00(0.94)****
信頼できる—信頼できない	3.73(0.69)	3.41(0.95)
ユーモアのある—ユーモアのない	4.05(1.01)	2.75(0.87)****
正直な—不正直な	3.98(0.88)	3.43(0.85)***
上品な—下品な	3.50(0.82)	3.57(0.93)
心が暖かい—心が冷たい	4.07(0.82)	3.45(0.85)**
民主的な—独裁的な	3.41(1.04)	3.73(0.85)
教養のある—無知な	3.98(0.76)	4.16(0.94)
柔軟な—頑固な	3.82(1.06)	2.75(0.89)****
繊細な—粗野な	2.93(0.82)	4.00(0.89)****
合計	44.52(5.85)	42.70(5.59)

注：* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ **** $p<.0001$

括弧内は標準偏差

に対してドイツ人は「頑固な」[$t(44) = -4.82, p < .0001$], 日本人が「繊細な」特質であるのに対してドイツ人は「粗野な」[$t(44) = 6.28, p < .0001$]という評価である。イメージ評価指標は、民族比較でもかなり適切に性格的特徴を描いているようである。

さて、こうしたドイツ人についてのイメージ評価および自分達の日本人についてのイメージ評価をを総括して、12項目の得点を合計したイメージ評価指数(最高が60点で、最低が12点)とドイツ語の最終成績との相関係数を出してみた。その結果、日本人に対するイメージ評価とドイツ語の成績とは、まったく関係がなかった($r = -0.008$)。ドイツ語を学習するのに、自分達の日本人のイメージをどう描こうと成績には関係ないという結果である。一方、ドイツ人に対するイメージ評価の場合は、ドイツ語の成績との相関が有意であった($r = 0.32, p < .05$)。つまり、ドイツ人に対してより肯定的なイメージを抱いている程、ドイツ語習得が促進されるという結果であった。

3.3 ドイツ語の成績と出席状況

最後に、授業への出席回数について調べてみた。ドイツ語の授業は90分の授業である。出席回数を調べてみると、12回の授業に平均で約10回余り($M = 10.14, SD = 1.50$)出席している。驚くべきことに、この出席回数が最終試験に、非常に強く影響していた($r = 0.70, p < .0001$)。動機づけとしてのドイツ語選択の理由とかイメージ評価指標とか議論してみたところで、本人が授業に出なくては学習が成り立たないわけである。結局、日頃、まじめに勉強しているかどうか、ドイツ語習得に最も強く影響するようである。「石の上にも三年」とは、よく言ったもので、外国語学習には、日頃の努力が大きく反映するようである。

4 研究の考察と継続的な総合調査への提言

本研究は、さらに大規模な調査を実施するための予備段階である。特に、「動

機」や「態度」などの測定尺度を適切に設定するために試験的に実施した。考察を加えて、本格的な調査への提言として、次の6つの点での改善が必要であろう。

第1に、ドイツ語選択の理由としては、社会的または心理的な理由という分け方では、学習への「動機」づけを適切に測定しないようである。選択理由よりも、学習動機に関連した質問項目の方が、動機づけをより正確に測定できるであろう。したがって、今後の調査では、学習の対象となっている言語(本研究ではドイツ語)に直接関連した理由と、むしろ学習の対象となっている言語の社会・文化的な内容に関連した理由の二つの側面を反映したような動機づけを問うような質問項目を設定した方が良さそうである。また、ドイツ語学習の動機を言語習得の観点からより詳細に調べることによって、教育的提言を含んだ実践的調査とすることもできるであろう。

第2に、ドイツ語学習による変化を調べるために、連続的なドイツ語の成績を示した指標を設定する必要があるであろう。ドイツ語の試験を等期間で数回実施することで、他の指標との連続的な比較が可能であろう。ただし、テスト作成においては、難易度の違いを調整する問題が残る。1回目の試験から項目を抜いて2回目の試験に含むというかたちで、連続的変化を以前の質問と新しい質問という二つの側面から見ていく方が適切であろう。また、以前の内容を理解していないと、次の内容がなかなか分からないこともあるので、どのレベルでつまづいたかを見るという教育的な学習進度の指標にも利用できるであろう。

第3に、動機づけやイメージばかりでなく、学生がどのようにドイツ語を学習するかを指標である学習様式(learning style)を調査に含むことによって、より適切な授業の形式などの教育的な提言ができるであろう。学習様式に関する調査では、すでにさまざまな質問形式のものが市販されているので、信頼性の高い質問紙が容易に入手できるであろう。

第4に、調査時期の問題である。ドイツ語の授業の始まりだけでは、ドイツ語の授業を通して学生がどのような変化を経験したかが分からない。そこで、

ドイツ語コースの初め(4月)と終わり(次の年の1月)に2回繰り返して実施する方が、より繊細で詳細なデータが入手できるであろう。したがって、ドイツ語選択の理由と、その理由が正しかったかどうかの2回の質問調査と、ドイツ人と日本人のイメージ評価をやはり2回実施して比較し、ドイツ語の授業を通してどのような変化が見られたかを考察すべきであろう。

第5に、おおざっぱな統計的な分析指標である相関係数を根拠にした議論のみでは、全体的な議論にしかない。そこで、ドイツ語の成績を基準にして、上位、中位および下位の能力別グループに分けて、ドイツ語のイメージ評価および動機づけなどを分散分析で考察すべきであろう。それによって、どの程度のドイツ語能力でそれぞれの指標が影響しているかをより詳細に分析できるであろう。また、能力に即した教育的提言が可能となろう。

第6として、全体的な指標をすべて含んだ因果関係の分析として、多変数による回帰分析やパス解析を行うべきであろう。ただし、これらの分析のためには、より多数の学生を調査対象とする必要がある。そのため、本研究の2倍以上の被験者を対象として調査を実施しなくてはならないであろう。今後の本調査では、こうした分析を想定して被験者数を決めるべきであろう。

本研究は、平成6年度の松山大学特別研究費の援助を受けて行った。